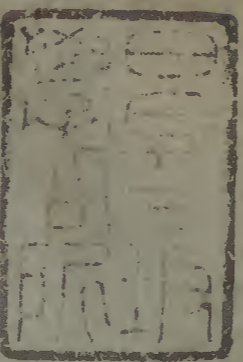
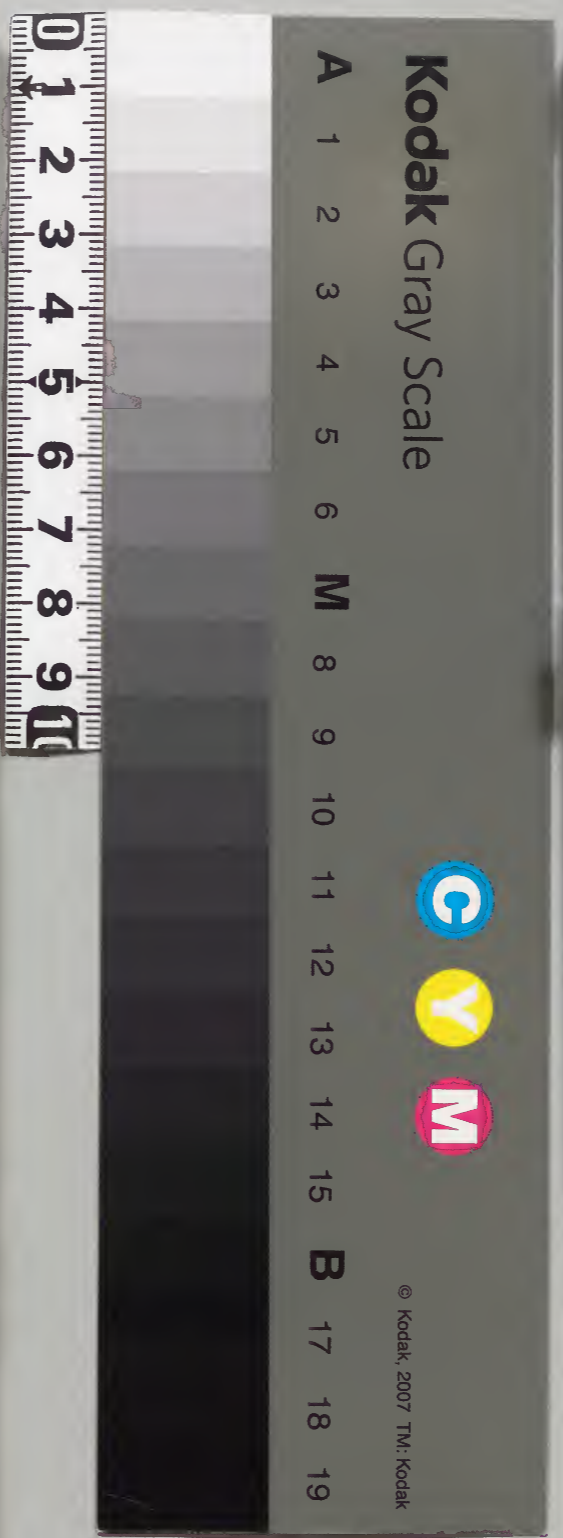


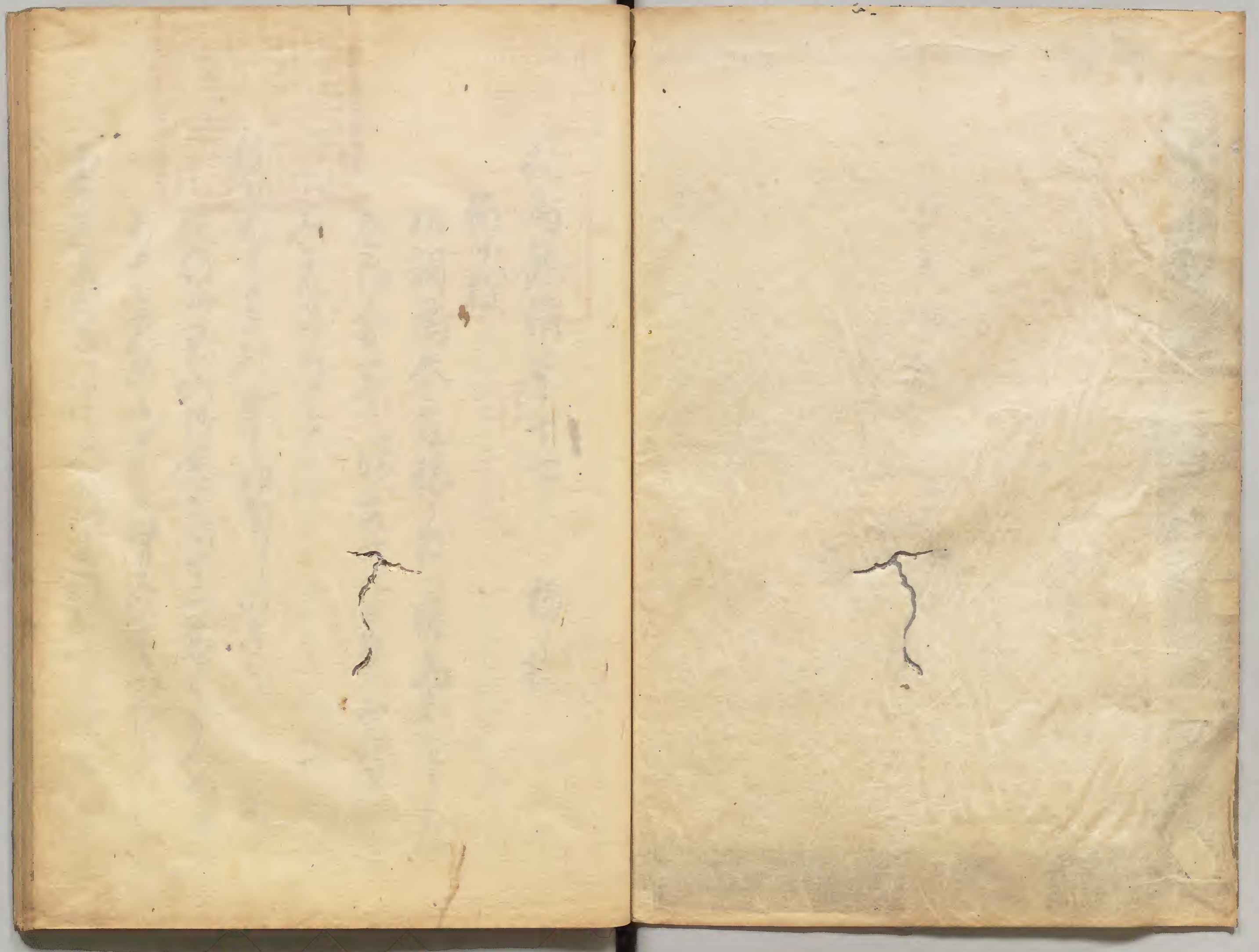
花鳥餘情

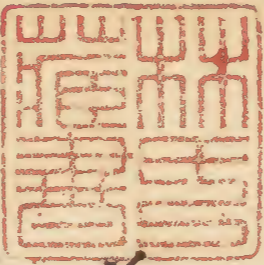
一の〇之



庫文閣内	
内閣文庫	
番號	和 20638
冊數	30 ( 17 )
函號	203 2



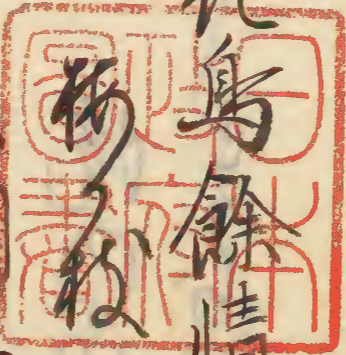




花鳥餘情才十七

梅う枝

浅草文庫



以詞為卷名梅う枝ハ催馬系とらん

尾海事ヤ源氏共九葉の正月の

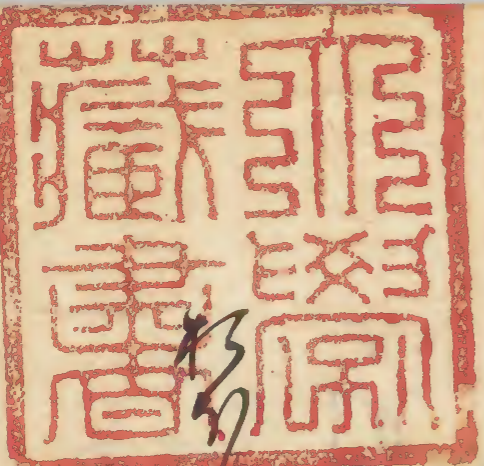
みえさうり

らんもまれ事叶りしつゝ

れひあまの心書こ十二葉くうりあ

あそまのうらめしきそり

ま文もなる二月は心かきうれ事



わづらひしきと

善文の朱雀院の宗

子に年十二歳に以て服ハせしむれ  
下にりり乞又治泉跡の二月の例と  
模せり

これさひのわづらひと物うら

故院は故

よ又る繁人の事おむら事あり時  
やよのまののらやとあらり二条  
院のゆかりありむいされ治山へ  
ららぬらや

らんしうれはらりありありれか

そりそんそんそんそんそんそんそん

らりりりりりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりりりりり

らりりりりりりりりりりりりりりり

心はくさまり水和仁の天皇は年  
號し二の方しと云ふなりと云は

よのころり

<sup>是</sup>人<sup>を</sup>ひん<sup>し</sup>れ<sup>あ</sup>る<sup>れ</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>ゆ<sup>り</sup>ん<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>る<sup>は</sup>  
ひん<sup>し</sup>れ<sup>あ</sup>る<sup>れ</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>ゆ<sup>り</sup>ん<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>る<sup>は</sup>

放出事 李部王託天曆元年

正月二日於大皇太后所院柏屋西對  
南放出平敷<sup>が</sup>王<sup>の</sup>座<sup>に</sup>南<sup>に</sup>對<sup>し</sup>鋪<sup>を</sup>以<sup>て</sup>  
為<sup>し</sup>東<sup>廂</sup>西<sup>向</sup>南<sup>上</sup>敷<sup>四</sup>位<sup>座</sup>又天曆元

年三月九日車駕幸朱蔭院其殿

扶<sup>各</sup>束<sup>疊</sup>母<sup>上</sup>屋<sup>敷</sup>放出南<sup>に</sup>對<sup>し</sup>鋪<sup>を</sup>以<sup>て</sup>座<sup>に</sup>  
放出安置佛像列供具東廂敷八僧  
座<sup>に</sup>又兼<sup>年</sup>七年十二月十七日陽成院

曆元年三月十六日大皇太后以柏殿

設法花八講十七日兼朱蔭院其殿

放出安置佛像列供具東廂敷八僧

座<sup>に</sup>又兼<sup>年</sup>七年十二月十七日陽成院

七十河<sup>原</sup>正殿西放出中<sup>に</sup>三<sup>間</sup>立螺鈿<sup>佛</sup>

子<sup>に</sup>小右記永觀元年正月二日中

宮大養其儀二系院東對南放出三間儲  
云卿座少と對座立臺盤每屋懸心屋底  
不懸心之四位侍臣座在兩廂西と北面右  
以此託加料簡者謂放出者南面每屋之  
若也河海曰廂者謀也所詮寢殿每  
屋而北中央以妻之隔之所謂子之  
哀平也或以障子以南方為放出以  
少為日方南放出中之儀其室有事  
時撤之決東殿放出西放出ト云者正殿中

央東西各有殿謂之東對西對寢  
殿と對之間有透渡殿不及對座作之  
時東西構云卿座子午中門と作とけ  
きつらむ對代とつる也東西對の代と故  
東對每屋とと放出とつる西に准じ物籍  
若菜局云南の并とれ西北放出と作  
とつるよとせりつる南のひとつる  
とつるよとせりつる西の放出と  
つるよとせりつる南のひとつる  
とつるよとせりつる西の放出と

しつて女房の侍りの一として又も寝方せん  
まら出と例のまらひてらん乃つ見  
より右の寝よらひみるる茶院の事せ  
これくもねむの南面は母屋とみてあり  
これよあしは寝むといふあしとの対は寝  
とまらや梅えの看れひんうの中  
これねむいあしの対は母屋や中といふあし  
屋し廂とのまら障子とまらてんて  
はまらいねむとまらてんあしとの対は  
は

りくはまらてんあしとの対は  
茶院のまら対のまらあしとの対は  
もいねむあしとの対は  
てあしをねむいあしとの対は  
西対はねむいあしとの対は  
のまらまらあしとの対は  
寝方よらひねむいあしとの対は  
ねむいあしとの対は  
あしとの対は  
あしとの対は

しるらりてや 源氏の老しは所度  
久よとね建れし 内せしやもせ給  
らしとらりこれいお射の取由みえ  
何うせ給ふじきまはれはけしを給  
取しと者別や又らりあまらり  
西の給中しつるいお射の取由みえ  
しとらりてや 源氏の老しは所度  
久よとね建れし 内せしやもせ給  
らしとらりこれいお射の取由みえ  
何うせ給ふじきまはれはけしを給  
取しと者別や又らりあまらり  
西の給中しつるいお射の取由みえ  
しとらりてや 源氏の老しは所度  
久よとね建れし 内せしやもせ給  
らしとらりこれいお射の取由みえ  
何うせ給ふじきまはれはけしを給  
取しと者別や又らりあまらり  
西の給中しつるいお射の取由みえ

八条  
見よとらりてや 源氏の老しは所度  
久よとね建れし 内せしやもせ給  
らしとらりこれいお射の取由みえ  
何うせ給ふじきまはれはけしを給  
取しと者別や又らりあまらり  
西の給中しつるいお射の取由みえ  
しとらりてや 源氏の老しは所度  
久よとね建れし 内せしやもせ給  
らしとらりこれいお射の取由みえ  
何うせ給ふじきまはれはけしを給  
取しと者別や又らりあまらり  
西の給中しつるいお射の取由みえ



よよりて次身よりくすれり物  
ハ多武より文の星との父或る心多り  
まよしくてより又も控方と不付男  
取和心門の心よりめれ方よのせされ  
し星らのこと白鏡よとくせされし  
源氏君れりしせぬよとなくたふと  
のうーていそふらふよはくくは  
るまらや  
かこれはこころのものはれ

或抄云末厨子のくはく。香壺言  
ニ合下腰よ葉の葉ニ合よは葉四合  
皆向物少く四角より葉は細物と可  
見壺言よ銀よ葉壺此大なる類  
壺と入るニ合よ八行り葉物と細料よ  
葉物ハ梅む花葉竹花里方とて納は  
け壺此中よ雲母壺り夕人。錦物立  
りりげとよ白針よ白針物の生れ物也  
表箱。まら。ら。号。入。帷。茶

若二合折立同し一合より記のとき  
する蓋三つおれさうわのころあり一  
合しうるさうひさしうりつぼめ  
飯箸の具は柄は露のじうひさし若  
草もさうさうさうさうさうさうひ  
さのあらに生れ物とさうけ若納め  
若と柄の方にはけりさゆえありて可  
至ひさし入帷日事し西厨子のさ  
乃勝よ造紙若二合折立あり物さの

造紙りり二合さうし切角れ若や  
下膳よ梯若二合丸角し以梯懸  
さふ祝わりの折立りり  
と案母  
屋初夜東西厨子の若八合りり其半  
二合六香蓋れ若く東厨子れ上よとく一  
合よ若蓋ホつて入て梅むお乃折さ蓋  
初雲母蓋りの中よ折さしりりさ  
ハ浪登に用く一尺のさよとん多ち  
折さし二条大袖を入道貴家母の

はしれとせぬしに申云業の旨よ  
紅香業書ありうくのんらととを  
さひうこれよとけりとてかぬは  
とく存れけいとく永久の西御友の  
黒水精とていふその業れ甚よい  
い物へのやぬるおろきとてい  
けし紅香ありとせん業うとせ  
いさうけりやとせぬとてい  
半堂よはうりてあらとて入寺家

例のしとけりやん永久のわと  
甚よいさうのしとけりも  
てけりとていふとてい  
いさうのしとけり  
うさうはうりていふと  
日元よいさうのしとけり  
いさうのしとけり  
おのうとていふと  
り



めきねるるる

はなはしそのなれりし

お梅の

わらわしとやそのなれみとらき

なぐくしとやしとらき

よのちもみしとらき

うらなれははしとらき 源氏の弟

ついでに妹流しのつとやとらき

きつとやとらきとらき

うらなれとらきとらきとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらきとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらき

あそぼつとらき

院よりきりけり 瑞瑞のつと二あふ中  
よの<sup>縛</sup>縛瑞瑞よめ 毎葉の枝白く梅と  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
まの下のたうとて つかうしる  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり

けりあもを 身松の葉のききんあふ家  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり  
とらめれと梅と梅のしる菊苑の  
えりてとらり 芳々あとう心みきり

毎の一人乃其の八条或は此れ其れ  
竹長王の命は梅と今を其れり  
おの二れしう八条侍男といふは其れ  
のありせぬをわが所よりなれと梅  
いふとえらるる事とわが所よりな  
れよ二の白とさきと昔の事か  
物とわが所よりなれと判し其れり  
寛教傍に流に梅をさきと昔の事か  
丁もとさきとわが所よりなれり

ういときんりりりりりり

かえりとさきとわが所よりなれり 乃其れ

うたわれも若衆とありせぬり  
せありんりりり

くれえりりりりりりりりりり  
藤院のとりりりりりりりりりり  
にえりりりりりりりりりりり  
こりりりりりりりりりりりり

あきのえりりりりりりりりりり









年かぬ梅えききなまよつこを祓く  
らのきもほろひひさきしとある  
いまの世ありきよりてちりるのよ  
ふあしや

その香とえきぬ触たりしと  
ちりるしりやちりるしりえ  
うちの縁きわしりるるるるる  
いしりるるるるるるるるるる  
あはるるる

しりるるるるるるるるるる  
あはるるるるるるるるるる

家のれい田とあはしりるるるる  
西の対れしあらしりるるるる  
あはるるるるるるるるるる

あはるるるるるるるるるる  
あはるるるるるるるるるる  
あはるるるるるるるるるる  
あはるるるるるるるるるる  
あはるるるるるるるるるる

ふらふらとよきうらたしむるに

まづこの世の事なり 還生

まじきまじき心花ありあめもあま

とまじきあり

かえりておんやうの世よめいしむるに

なり多り 一の世に假名を弘法

大師始作し以前假名如日本紀万葉

新書物や日本紀も假名書之万

葉集を以音と訓と義書之

とよりていし あらうの奥也

昔にうらたしむるにうらたしむるに

まじきまじきあり

ふらふらとよきうらたしむるに

はれはよきうらたしむるに

物してよきうらたしむるに

ゆきまつまきあまも假名はよき

はれはよきうらたしむるに

ふらふらとよきうらたしむるに

うらやまのし

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは

うらやまのしはうらやまのしはうらやまのしは



能く久遠の筆硯同乎と云ふと案考と分  
と云ふ初め等々云々云々云々云々云々  
かたき

足利人の後人ありきんさるれぬ  
獲麟の一句これと云ふ人の後と云ふ  
此人の後と云ふ守心此一句これと  
云ふ云々云々云々云々云々云々云々  
字此と云ふ日此と感嘆と云ふ  
事此と初と云ふと云ふ

さうれみかしの古万葉集と云ふひくせ  
終つる云々 万葉集一部 古万葉集

皇詔侍臣撰見古今序又万葉抄  
是等一説此書と一説梨葉此人抄  
同抄表抄不知撰者若此外漢書津撰  
四巻目六中不見但し此りき撰定の  
抄とていふと云ふ此多岐に及ぶ  
ひくせ終つるめや初め

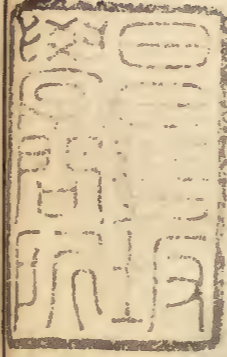
是等乃みかしの古今和歌集と云ふ  
終











Faint, illegible handwritten text in seal script (shu) covering the right page.

